

8 通訳基礎トレーニングにおける他者作成資料にもとづくプレゼンテーション

学院手話通訳学科 市田泰弘 木村晴美 宮澤典子 野口岳史

手話通訳学科では学科開設以来、語学力（第二言語としての日本手話の能力）が十分に備わるまでの期間、通訳時に必要となる語学力・翻訳力以外の能力をあらかじめ強化するために、1年次の前期に「通訳基礎トレーニング」という科目を設定してきた。最近では「他者の話を理解する能力」そのものの向上が最大の課題となっており、同科目の内容の見直しが迫られていることについて昨年度報告したところである。今回は新しく導入したトレーニングについてその理論と実践について報告する。

今回新しく導入したトレーニングは「他者作成資料にもとづくプレゼンテーション」である。

本来受動的なプロセスである「理解」能力の向上に、能動的な「プレゼンテーション」を用いることの有用性についてはもはや説明不要であろう。では、「他者作成資料にもとづく」とはどのようなことか。

本来プレゼンテーションにはその前段階として「テーマ決定、目標設定、調査、構成、発表資料作成、発表者ノート作成、リハーサル」といったプロセスが含まれる。当学科でも従来通訳基礎トレーニングを終えた1年次後期に「現代社会」という科目の中で、また2年次には「通訳実技：場面通訳」の中で「原話者役」担当者に、それぞれプレゼンテーションを課してきた。また、実習報告会など折にふれプレゼンテーションの機会を提供してきた。しかし、そこで問われる能力は多岐に渡る一方、「内容理解」の乏しさを、該当部分を意図的あるいは無意識的に発表内容に盛り込まないことや、資料・ノートの詳細化、綿密なリハーサルなどによって覆い隠すことができる面もあることは否めない。そこで、発表資料・発表者ノート作成までが他者の手によって完了したものをを用いて、プレゼンテーションのみを課するという形をとることで、「内容理解」の向上に特化したトレーニングが可能になると考えたわけである。また、この方法の利点としては、このトレーニングのあり方自体が、実際に（特に学術分野において）通訳者が通訳時に求められることとほぼ同じであることがあげられる（事前準備についてはまったく同じ、プレゼンテーションについては翻訳プロセスを伴うか伴わないかだけが異なる）。

現在実践しているトレーニングは次の3つである。

- (1) 教官が作成した発表資料にもとづくプレゼンテーション
- (2) 教官が講義時に板書した用語や図式にもとづくプレゼンテーション
- (3) 課題図書を輪読し担当学生が作成した資料にもとづくプレゼンテーション

特に(1)については、あえて発表資料を詳細化せず、「発表資料の文言を丸ごと読み上げる」という状況を作らないようにすることに配慮している。また、資料提示から発表までの時間や作業をコントロールし、「話す内容を丸暗記する」という状況も作らないようにしている。

実践結果については現在分析中であるが、学生の理解能力の向上につながるのではないかと期待しているところである。